

かみす

Pick up

▶第25回参議院議員通常選挙の
お知らせ

特集

まちの魅力再発見

鳴り物

未来へつなぐ大潮祭の伝統

夜に聞こえる鳴り物の音が、夏を知らせる風物詩となっている波崎地域。今年も少年鳴り物教室が、はさぎ生涯学習センターで開催されました。大潮祭での披露に向け、子どもたちは真剣に練習に励んでいました。指導するのは「波崎鳴物保存会」と「はさぎあばれ太鼓会」の皆さん。伝統を未来へつなぐ指導者の想いと、子どもたちの声をご紹介します。

AR

広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は14ページ

鳴り物

未来へつなぐ大潮祭の伝統

祭囃子が聞こえると心が踊る——。そんな根っからの祭り好きにとって、今年も待ちに待った夏がやってきた。市内には、各地区の伝統や個性が色濃く表れたさまざまな祭りがあります。その一つが江戸時代から続く大潮祭。今回は、地域の子どもたちに伝統の鳴り物を継承していく取り組みを紹介します。



大潮祭の一翼を担う子どもたち

大潮祭は、古くより息栖神社、大洗磯前神社とともに「鹿島神宮の三摂社」と称される手子后神社で、航海の安全と豊漁、五穀豊穡を祈願する祭礼として行なわれてきました。漁師町ならではの威勢のいい掛け声や神輿、躍動感あふれるはね太鼓が魅力です。

この勇壮な祭りの一翼を担うのが、地元の子どもたち。各地区から子供神輿10基が手子后神社に集結し、御祈禱の後、子どもたちの鳴り物に先導されて各地区を練り歩きます。その後、波崎漁港で「少年少女鳴り物コンテスト」が盛大に開催され、大

潮祭の見どころの一つとなっています。熱気あふれる「少年鳴り物教室」

大潮祭鳴り物は市の無形民俗文化財に指定されています。子ども頃から鳴り物に親しみ、やがて大人になつてからも大潮祭を支えてほしいと、市では「少年鳴り物教室」を開催。今年は5月から6月にかけて計8回、はさき生涯学習センターに中学生が集まって練習しました。指導するのは、「波崎鳴物保存会」はさきあばれ太鼓会」の皆さんです。

練習が始まると、多目的ホールは腹の底にズンと響くような太鼓の音に包まれます。1尺5寸の和太鼓を脇に抱えて打ち鳴らしながら、3人

一組となつて掛け声と共に踊るはね太鼓。その周りではツケ(付締太鼓)、笛、鉦が軽快なリズムを奏でます。海が荒れたり穏やかになったりする様子を、はね太鼓と曲で表現するのが最大の特徴です。

バチの構え方、腕や足の角度から姿勢までいいに指導して回る、はさきあばれ太鼓会の皆さん。「波崎の鳴り物は声を出してなんぼだよ。みんな大きい声を出そうね」と呼び掛けると、目に見えて子どもたちの演奏や動作が元気になり、熱気が渦巻くようです。これから練習を重ねて祭り本番を迎える頃には、どれほど迫力のある鳴り物となるのか期待が高まります。

鳴り物はカッコいい！

少年鳴り物教室に参加している波崎第一中学校3年生の松村学翔さんと篠塚愛斗さんに、太鼓を習い始めた理由を聞くと「親戚や先輩がやっているのを見て、カッコいいし楽しそうだったから」と答えてくれました。「小学1年生の時から大潮祭に参加していて、最初が子供神輿、4年生からは笛、中学生になって太鼓をやっています」という松村さんと、「太鼓で難しいのはツケのリズムに合わせるところ。楽しいのは同級生と一緒にやれるところです」という篠塚さん。2人に少年少女鳴り物コンテストへの意気込みを尋ねると、「優勝を目指します！」と頼もしい返事が聞けました。



①



②



③



④

①昨年の少年少女鳴り物コンテスト ②少年鳴り物教室でリズムを奏でるツケ(付締太鼓) ③腕の角度や姿勢を丁寧に指導 ④松村さん ⑤篠塚さん ⑥田向さん

波崎第一中学校2年生の田向生芽さんは、鳴り物全般を習得。この日は笛を担当していました。「太鼓、ツケ、笛、鉦とそれぞれに面白さや魅力があります。誰よりも早く全部できるようにしたい、上手になりたいと思って家でも練習をしました。私が好きなのは、中心的なメロディを作る笛やツケです」と元気いっぱい。「家族がお祭り好きなので、私



経験者クラスは指導者の動きや音色から学び取る

も当たり前前に鳴り物を習い始めました」と話す田向さん。家族ぐるみで大潮祭を楽しみにしています。

根気よくていねいに笛を指導

研修室では、中学1年生が笛の練習をしていました。指導するのは、波崎鳴物保存会の皆さんです。中学生で笛を始めた初心者クラスと、小学生の頃から吹いている経験者クラスに分かれています。初心者クラスは、まず音を出すところから。「諦めずに頑張ろう。絶対できるから」と励まされ、悪戦苦闘しながら繰り返すうち、少しずつ澄んだ音が出るようになっていきます。次のステップは曲の習得。指導者がメロディーを口ずさんだり指の動きをゆつくり見せたりして、少しずつ覚えられるようになっていねいに指導します。

経験者クラスはすでに曲を覚えており、全員の音色がきれいに重なります。あとは細部の節回しなど、完成に近づけていく段階です。

細めの笛に込められた思い

曲は、道を進むときの「道中囃子」、テンポが早く威勢のいい「早ばか」、締めくくりに吹く「あんば

様」の3つ。神輿が進み、暴れ、やがて収まる。その一連の流れと曲が見事に調和するのが醍醐味です。

そう教えてくれ

たのは、波崎鳴物

保存会会長の横濱

保次さん。実は子

どもたちが使って

いる笛の多くは、横濱さんが作ったもの。「波崎の笛は4調子半という独特なもので、7つの穴の間隔がやや広がっています。笛が太いと子どもには扱いづらいので、なるべく細めの篠竹を使って笛を作っています」と横濱さん。鳴り物が継承されていく背景には、こうした細やかな心配りと熱意があるのです。

もう一つ、子どもたちの手元には楽譜がわりのプリントが配られています。一音ごとに、笛のどの穴を押さえるかを図にして並べたものです。「昔は大人の指を見て覚えるしかあ



横濱さん



①



②



③

①みんなの音色がきれいに重なり合う
②はさきあばれ太鼓会 ③波崎鳴物保存会



若い力で大潮祭鳴り物「はね太鼓」の継承をけん引しているのが、はさきあばれ太鼓会です。1997年に地元の青年たちで結成され、20代から30代を中心に高校生を含む約70人の会員がいます。市主催の「少年鳴り物教室」だけでなく、独自に

地域の伝統を未来へ繋ぐ

りませんでした。今はこのプリントがあるので子どもたちが家でも練習できるようになりました。せっかく練習するのですから、大人になってもぜひ続けてもらいたいですね」という横濱さんの言葉に、継承への深い思いが込められています。

「あばれ塾」を運営し、小・中学生に鳴り物の楽しさを伝えようと熱心に活動しています。

はさきあばれ太鼓会の滑川さんに、継承への思いを聞きました。「波崎の子どもたちは、大潮祭鳴り物を聞いて育ちます。みんなが知っているリズムで一緒に盛り上がる楽しさは、なかなかほかでは味わえません。大切なのは、その楽しさを子どもたちに伝えること。うまくきつかけを与え、基本的なことをしっかり教えて、あとは子どもたち自身が大いに盛り上がってもらうのが一番。地域の人たちが昔から繋いできたものを、ただ守るのではなく、未来へ繋ぐ」

のが私たちの使命です」と熱く語る滑川さん。

子どもたちは、中学3年生ともな

ればはね太鼓演奏もかなり上達しています。高校生になつてはさきあばれ太鼓会に入れば、また同年代の仲間と一緒に鳴り物を続けていける。そうして世代が途切れることなく継承されていくことを、地域みんなが願っています。

未来を背負って立つ子どもたち

「はね太鼓を見るのも楽しいけれど、自分でやるともっと楽しい！」

「青少年鳴り物コンテストは、失敗し



滑川さん

てもいいからとにかく元気に声を出して、みんなで明るく楽しく頑張ります」「地元到大潮祭があることを誇りに思っています。だから波崎が大好きなんです」

鳴り物の練習をしながら、瞳を輝かせて話してくれた中学生たち。その言葉に、地域の伝統が未来へと繋がれつつあることを実感しました。

今年も7月13日と14日の2日間にわたって大潮祭が行なわれます。宵宮・本宮の終盤に荒々しくもみ合う神輿、本宮のお浜おり・お塩汲みの儀など見どころ盛りだくさん。今年は、大潮祭の未来を背負って立つ子どもたちの勇姿にも、ぜひご注目ください。